乙　第　　号

髙濱潤子　学位請求論文

審　査　要　旨

奈　良　県　立　医　科　大　学

論 文 審 査 の 要 旨 及 び 担 当 者

報 告 番 号	乙　第　　号	氏　名	髙濱潤子
論文審査担当者	委員長	教　授	小林　浩
	委　員	教　授	大林千穂
	委　員	教　授	吉川公彦
	（指導教員）		

主論文

Retained placental tissue: role of MRI findings in diagnosis and clinical assessment

遺残胎盤組織：診断と臨床的取り扱いにおける MRI 所見の役割

Takahama J, Kitano S, Marugami N, Uehara T, Takahashi A, Takewa M, Itoh T, Kichikawa K.

Abdominal Imaging　第 36 巻　第 1 号　110-114 頁

2011 年 2 月発行

論文審査の要旨

近年帝王切開術の増加に伴い、癒着胎盤、前置胎盤や癒着前置胎盤などが増えてきている。これらの疾患は産科危機的大量出血をきたすことがあり、慎重な産科管理が要求されている。癒着胎盤があると分娩時に胎盤組織が自然脱落せず子宮腔内に残存する場合がある。無理な剝離は大出血を来し得るため、MRIによる評価を行うことが多い。ある程度時間的余裕があれば抗がん剤投与にて絨毛組織を壊死させることもあるが、出血が多く緊急を要する場合は経皮的子宮動脈塞栓術（UAE; Uterine arterial embolization）を施行することもある。その結果、自然脱落を起こす場合もあれば、時期を見て経腟的切除術が選択されることも多いが、どのような症例が経過観察すべきか、あるいは何らかの介入をすべきかは現時点では統一された見解はない。

そこで、申請者は遺残胎盤組織に対してMRIが施行された11例について、MRI所見を後方視的に詳細に検討し、遺残胎盤組織の大きさ、T1強調像、T2強調像での信号、ダイナミック造影後の濃染パターン、濃染の程度、筋層との付着部の範囲、付着部の筋層の厚みを検討し、臨床経過および治療内容と比較した。その結果、子宮腔内の遺残胎盤の状態を把握する指標を提案した。その中で最も有用な指標は、胎盤付着部の範囲が子宮内腔の半周以下であった場合は、治療的介入をしなくても経過観察することにより自然脱落する可能性が高いことを見出した点である。

本研究の成果は遺残胎盤のMRI画像所見から治療法の選択ができること示したことであり、有意義な臨床研究と評価された。参考論文とともに学位に値するものと考える。

参 考 論 文

1. Adenomyosis: MRI of the uterus treated with uterine artery embolization.

   Jha RC, Takahama J, Imaoka I, Korangy SJ, Spies JB, Cooper C, Ascher SM.

   Am. J. Roentogenol. 181: 851-856, 2003.

2. Visualization of ovarian tumors using 3T MR imaging: diagnostic effectiveness and difficulties.

   Uehara T, Takahama J, Marugami N, Takahashi A, Takewa M, Itoh T, Kitano S, Nakagawa H, Kichikawa K.

   Magn. Reson. Med. Sci. 11: 171-178, 2012.

3. Ectopic pregnancy: MRI findings and clinical utility.

   Takahashi A, Takahama J, Marugami N, Takewa M, Itoh T, Kitano S, Kichikawa K.

   Abdom. Imaging. 38:844-850, 2013.

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに周産期並びに放射線医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

平成　26　年　11　月　11　日

学位審査委員長

女性生殖器病態制御医学

教　授　　小林　浩

学位審査委員

臨床病理診断学

教　授　　大林千穂

学位審査委員（指導教員）

画像診断・低侵襲治療学

教　授　　吉川公彦